
散歩

瀧川 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

散歩

【Nコード】

N4420I

【作者名】

瀧川 蒼

【あらすじ】

高校生のある夜の出来事。
ほのぼのです。

午前一時。

秋というよりはもう既に冬を前倒したような寒い夜中、俺はふと窓を見た。

開いていた問題集とノートをそのままに、カーテンの向こうを覗き見る。

見慣れた景色だ。わずか先の道路と向かいの家と道路脇に立っている常夜灯。

「まあ、たまには」

呟いて、窓辺を離れ、掛けていた上着を羽織った。
理由？

（強いて挙げるならば）

自分に対して言い訳をする。

（まるで別世界のようなだったから？）

白い光がぼんやりとされていて、どこか違う世界に呼ばれているような気がしたんだ。

「さっむー」

一歩外に出てしまえば、そこはただの道路だった。

（当たり前か）

しんしんと冷えてゆくばかりの空気が、包む物のない首や手からあっさり熱を奪っていく。

それでも、わざわざ外に出て来たのにすぐ戻るのも嫌で、足の向かうまま進む。何も目的なく、しかも夜に、外にいること自体が珍しかった。

ざり、と石を踏む自分の足音と、若干遠くにそしてまばらに聞こえる車の音しかない。こんなコンビニもない町の中では、もう誰もが眠りにについている時間だ。

と、道の先になんだか白いものが見えた気がした。

（あれ？）

前に進む足は緩めずにじっと見てみると、ぐんぐんと大きくなるそれは、真っすぐ俺に向かって来ているらしい。

「え、わあっ」

どこかふわふわと夢見心地だった俺は、避けるという選択肢さえ浮かばず、どん、とぶつかられてそのまま後ろに倒れた。

「くうん？」

尻は打ったが、なんとか頭を打ち付けることだけは回避した俺の胸に、ずっしりとした重みがかかる。

「わん！」

わんって……犬か？

はふはふという生暖かい息が俺の鼻先に触れた、と思ったらそのままべろべろと口を舐められた。

犬って口舐めるの好きなんだよなあ。うちのもそうだったなあ。

しつばが高速で振られているのを視界に入れて、ほっと息をついた俺は、のんびりと昔飼っていた犬を思い出す。わしゃわしゃする毛の感覚も懐かしい感じだ。

「わっ、こらっ。ちび、やめろっ」

焦った声がして、若干だが重みが減った気がした。

「すみません、大丈夫ですか？」

上から聞こえて来た声が、なんとなく聞いたことのあるものだな、と思って顔を上げると、はたして確かに見知った相手だった。

「東野？」

高3になって初めてクラスが一緒になった奴だ。頻繁に会話をする訳ではないけれど、挨拶くらいはするし、実験かなにかで一緒の班になったこともあったと思う。ちゃんとは覚えてないけれど。

「なんだ、葉山か」

「何だってなんだよ」

拍子抜けしたように言うから、呆れて言い返してやる。声のトー

ンまで明らかに変わってるぞ！

「はは、悪い。知り合いだったから気が抜けたただけだよ」

自分でもその変化が分かっているんだろう、東野は頭を掻いて言い訳らしいことを言っていると、未だ俺の上に乗っかっている犬を後ろから引きずり下ろした。

「こいつ、ちびって言う割にはデカくない？」

やっと冷たい地面から身を起こした俺は、尚もじゃれてこようとするその鼻面を押しやりながら訊く。立ち上がって見下ろすちびは、立派な毛並みと太い足を持った大型犬だ。暗くてよくわからないけど、ゴールデンレトリバーか何かだろうか。

「もらって来た頃はちっちゃかったんだよ。そのころは犬種なんか知らなかったしなあ」

「わん！」

俺に同意する東野の隣で、ちびが元気よく吠える。なんというか、愛想のいい犬だ。

よしよし、と頭をなでるとぱたぱたとしっぽが揺れる。

「かわいいなあ、お前」

「……お前の方が」

「ん？ 何か言った？」

「いや。何でもなし。しかし、こんな時間に何してるんだ」

ごほん、と咳をした東野に、散歩、と短くそして小さく答える。いかにも不審だろう、こんな真夜中にうろつろつしていたら。

「そ、つか。俺は明後日の模試が憂鬱でさ、コイツ起こして外に出て来ちゃったんだ」

にか、と笑った東野に、ほっと息をつく。そっか、俺だけじゃないのか。

「だよなあ、俺も、もう数学が壊滅的でさあ」

「お前……！ 葉山が壊滅的だったら、俺とかどうなるんだよ」

恨みがましい目で見られて、苦笑する。そういえばこないだの間試験の答案返却の後、東野の点数のひどさを仲のいい奴らが面白

そくに離し立てたような気がする。

「まあまあ。本番じゃないだけマシだね」

「ホント。このまま受験に突入したらマジやべえよ」

あはは、と二人して乾いた笑いを浮かべる。冗談にできるだけ、まだ余裕のある方だ。

「っ、くしゅん」

「おい、風邪ひくなよ」

寒さのせいかくしゃみがでて、俺は自分の肩を抱えた。そういえば、上着を着ただけで出て来たから、かなり冷えてしまっている。

「ほれ」

東野の声に、へ？ と顔を上げると、首が暖かいもので包まれた。

「え、あ、ありがとう」

東野の首の辺りがやけにすっきりしたな、と思いながらなんとなくで礼を言つて、それから時差でマフラーを俺の首に掛けてくれたんだ、と気づいた。

「明日返せよ、それ。？？じゃっ、学校でな！」

俺が遠慮する暇もなくきびすを返した東野は、ずるずるとちびを引つ張つて反対方向へ走り出した。

「……いい奴だなあ」

ぽかん、とそれを見送っていた俺は、東野が角を曲がって見えなくなつたところに呟いた。

「俺も帰ろ」

くるり、と方向転換して元来た道を辿る。

頬を撫でる風はやっぱり冷たくて、乱視の目で見える夜道はやっぱり白くふわふわとしていて、東野と会ったこともなんだか夢のようだけれど。

（……あつたかい）

明日、ちゃんとお礼を言おう。

それから、ちびにもう一度触らせてもらうんだ。

手触りのいいマフラーに両手で触ってみて、俺は小さく笑った。

（後書き）

もともとはシリアスになる予定だったのですが、いつの間にかBLに（笑）

短編ばかりですが、ブログでupしてます。

cantare
http://cantare424.blog67.fc2.com/

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4420i/>

散歩

2010年10月8日15時26分発行